



■写真1(上・昭和29年)、  
写真2(左・平成14年)昭和11年から平成8年まで親しまれた仏閣型の駅舎



## あの頃の風景

千曲川・信濃川編 第2回  
「オリンピックによる変化」  
長野市

国際航業株式会社/技術・営業推進本部  
惣慶裕幸 SOKEI Hiroyuki



■写真3—下流で信濃川に  
なる千曲川 ■写真4—再建300年を記念し五色幕で飾り  
つけられた善光寺本堂

長野市は長野県北部に位置し、市の中央部を千曲川とその支流である犀川が流れている。川中島の古戦場、真田十萬石の城下町・松代、戸隠連峰の山々など観光資源に恵まれているが、最も有名なのは善光寺であろう。長野市の名を世界に広めた平成10年の第18回オリンピック冬季競技大

会の開幕を告げたのは、善光寺の<sup>ほんしやう</sup>梵鐘であった。

長野市は、この善光寺の門前町・北国街道の宿場町として始まった。廃藩置県により明治に県庁が置かれ、明治21(1888)年、現在の場所に長野駅が開業して以降、県都として商業の中心地として栄えてきた。しかし、高度経済成長期以降に市街地が郊外に拡大したこと、車社会への移行が急速に進んだことから、市内では慢性的な交通渋滞が発生するようになった。また、郊外への人口流出に伴う都市機能移転が進行し、空き店舗が目立つなど中心市街地の衰退が問題となっていた。

そんな中、平成3年にオリンピック開催地が長野に決定すると、開催都市にふさわしい基盤整備が進められ、長野市は急速にその姿を変えていくことになった。高速道路や競技会場へのアクセス道路が整備され、通過交通を排除するため昭和53(1978)年に計画された幹線道路網は平成8年に完成した。

昭和11(1936)年以来親しまれてきた仏閣型の駅舎に代わり、平成8年に橋上駅舎が完成し、翌年には新幹線が開業した。東口には駅前広場と地下駐車場が整備され、オリンピック開催時は、会場へのシャトルバスの発着場やボランティア交流広場、地元広場、スポンサー広場などが設けられ、東口オリンピックプラザとして活用された。東口駅前にホテルなどのビル群、西(善光寺)口駅前に再開発によるビルが完成し、長野駅周辺は近未来を思わせる新しい姿に様変わりした。

長野市の中心市街地は、長野駅と善光寺の間約2kmの中央通り周辺である。中央通りは大正13(1924)年に幅員約18mに拡幅され、ほぼ現在の姿になった。昭和20年代後半には日よけや雪よけのためアーケードが設置された。しかし、オリンピック開催を機に「ゆったりと歩ける道」を目指し、平成8年までに電線類を地中化し無散水融雪施設を敷設し

てアーケードは撤去された。中央通りは白壁の建物が印象的なゆとりある道に変わり、オリンピック開催時には善光寺への参道として、また表彰式の会場であるセントラルスクウェアへの通り道として賑わった。こうして善光寺周辺は世界中から注目され、歴史ある長野市の顔として再認識された。

オリンピックでは、多くの市民が長野を訪れる選手・役員・観客・応援団を温かく歓迎し、駅周辺や歩道の除雪、会場周辺や観客用駐車場での飲食物のサービス、ボランティア活動などを通じてオリンピックに参加しこれを支えた。長野を訪れた世界中の人々と接する中で地域の魅力を再確認し、おもてなしの心を磨けたことは、今でも長野市民の大きな財産となっているのではないだろうか。

オリンピック後の平成12年には、中心市街地において中核を担っていた百貨店と大手総合スーパーが相次いで撤退した。しかしその後、善光寺の参道らしく白壁の土蔵や商家を活用した商業空間「ばていお大門」や、ガラスで覆われた外観が新しさを主張する複合施設「TOiGO(トイゴ)」など魅力ある施設がオープンし、人を呼び込むため四季折々に工夫された様々なイベントが開催されている。

歴史を受け継ぎながら未来を志向するまち。二つの魅力を見せる長野市中心部の今後に期待したい。

今回は・・・

信濃川河口に広がる都市、新潟市・・・

<参考文献>  
「長野市誌」長野市  
「長野地区中心市街地の活性化に関する基礎調査報告書 概要版」長野市・国立長野工業高等専門学校

<写真提供>  
写真1、2、5、7：長野市  
写真3、4、6、8、9、10：筆者



■写真7(左・平成12年以前)  
■写真8(上・現在)  
大規模店が無くなり複合施設ToiGOとして再開発された新田町交差点付近



■写真5(上・平成8年以前)  
■写真6(左・現在)  
電線類を地中化してすっきりした中央通り。



■写真9—パティオ大門



■写真10—善光寺から長野駅の街並み、遠く犀川を望む